

G・H・ミード理論におけるマクロ社会学的視角

— 役割取得のプロセスをもとに —

山 本 桂 子

一、はじめに

一九五〇年代以降、T・パールソンズを中心とする構造機能主義は、アメリカ社会学界をほとんど完全にとと言えるほど支配し、出版物や大学の講義においても、その内容は機能主義一辺倒となり、「パーソニアンでなければ社会学者ではない」とまで言われた社会的背景をつくり出した。やがて、この構造機能主義の対抗理論として、個人の主体性の欠落、社会を静的な均衡構造として認識していることなど、数々の批判を携えて、象徴的（シン

ボリック）相互作用論（以下、シンボリック相互作用論と記す）が現れてくる。そして、これらの二つの理論は、あくまで相反する理論として相互に位置づけられてきた。しかし、同じシンボリック相互作用論者の中でも、G・H・ミードの社会理論は、その自然科学主義指向という特徴から、マクロな視点を持つものであると考えられる。また、構造機能主義においても、意味シンボルや意味の解釈過程を完全に無視してしまっているのだらうかという疑問も感じる。よって、これらの理論が、全く相反するものであると断定するのは、あまりにも直接的で、早急な判断であるという気がしないでもない。そこで、こ

の小論は、ミードの自我形成プロセスをもとに、シンボリック相互作用論にマクロな視点が存在することを確認しようとするものである。

二、シンボリック相互作用論の歴史的潮流

今日のシンボリック相互作用論は、W・ジェームズ、C・H・クーリー、W・I・タマス、J・M・ボールドヴィンにはじまり、もっとも中心的にはG・H・ミードの理論がその源流となつて発展してきた。そして、それは人間の「解釈過程」に重点をおきながら、人間の他の人間との相互作用過程を通じて形成される人間の主体性を明らかにするものであり、さらに、その主体的、積極的、能動的な人間と社会のダイナミックな結びつきを明らかにしようとするものである。つまり、「自我の社会性」と「人間の主体性」に焦点を置いたものであるといえよう。しかしながら、シンボリック相互作用論者たちは、行為者の主体性や解釈過程の側面を重要視するあまり、解釈

の裏面にある「被解釈」の側面を軽視してしまったという批判もあるのだが、これはまた、別の機会にゆずるとして、それはともかく、シンボリック相互作用論者たちは、人間の行為が、決して単なる物理的環境や社会構造に規定されるのではなく、シンボリックな相互作用の過程から、その行為は、必ず主体性を伴ったものであると主張する。また、人間は、その主体性ゆえに、環境や社会の状況などに対し、積極的に、選択し、解釈し、意味付けをおこなっているとする。そして、さらに、このことは、人間が他の動物と区別される特性であると付け加えている。

ところが、これほどミクロンシオロジーにおいて、隆盛をきわめたシンボリック相互作用論が、ミード没後、つまり一九三〇年代頃から低迷することになる。その要因には、およそ三つが指摘されている。(1)ミード理論がこのほか複雑で、あいまいであることから、その概念を混乱させ、定式化や体系的な位置づけを不可能にしまったたり、決定論や非決定論に二分されてしまったこと (cf. Meltzer, 1959 Kuhn, 1964b)、(2)この理論が自

我論、パーソナリティー論、社会化論、コミュニケーション論、役割理論、準拠集団論などといった数々のレベルで多面的にアプローチされ、細分化され過ぎた結果、全体としての理論の統一が見失われてしまい、専門化されたそれぞれの理論が、ひとり歩きをはじめてしまったこと、(3) T・パーソンズを中心とする機能主義社会理論が抬頭し、それが、社会理論の一世を風靡するに至ったこと(Bolton, 1958, p.45) が、あげられる。

しかし、一九六〇年代のアメリカ合衆国において、シンボリック相互作用論が、再び注目の的となりだした。H・ブルーマー、T・シブタニ、R・H・ターナー、L・T・レイノルズ、E・ゴフマンといったシンボリック相互作用論者たちが、新たなシンボリック相互作用論の展開を目指そうとしたのである。その理由として、第二に、一九四〇年代から五〇年代にかけて細分化されてしまった特殊研究を、再度整理し直し、その統一を図ろうとする試みが行われた。これは、一九二〇年代から三〇年代にかけての古典的諸理論にたちかえり、検討しようとし

たのである。第二に、「シンボリック相互作用主義」の立場に立つ研究者たちが、自らの見解を積極的に展開しようとしたことである。それは、単なる「ミードの復活」を図るものではなく、人間の創造性、自主性、積極性、自発性を重視し、ユニークな理論の構築を試みたものである。つまり、「ミードそれ自体へ」ではなく、「ミードから」という観点である。そして、第三に、この時代のメイン・ストリームであったT・パーソンズを中心とする構造機能主義に対する反発であったことは、看過できない事実であろう。構造機能主義理論は、安定的で、均衡状態にある静的社会においては、妥当なものとなり得るところが大きいのであるが、急激な変動を伴う動的社会においては、批判を免れないという点は、現在多くの社会学者の知るところである。

三、自我形成プロセスにおける役割理論

では、ミード理論における役割取得の重要な側面であ

る人間の自我形成のプロセスを整理してみよう。

さて、自我の発達過程を考える場合、重要な活動となるものはコミュニケーションであろう。個人は、必ずいくつものコミュニティの中に存在し、しかも、そのたいていは、言語を用いて関係を維持している。個人は、その所属する集団や、コミュニティのなかで、相互作用や相互理解を深化させながら、自分の役割を把握する高度なコミュニケーションを行っている。ミードの自我論の特徴は、このような個人が他者に向けて行為する側面（外的コミュニケーション）と、自己自身に向けて行為する側面（内的コミュニケーション）の二重の側面での他者との意味のやりとりを重視したことである。³そして、ミード理論のなかで、自我の内的対話としての「I」（主我）と「me」（客我）が、思考過程を位置づけるものとなっていることも重要である。

自己対象化を特徴とする自我は、「〔人間が〕誕生したとたんにすでにあるものではなく、社会的経験や活動の過程で生じるもの、すなわちその過程の全体およびそ

の過程にふくまれている他の個人たちとの関係形成の結果としてある個人のなかで発達するもの」であるから、生物体そのものとは区別されるものである。

では、個人は、このような自我をどのように経験するのであるうか。個人は、同じコミュニティ、あるいは、属しているコミュニティ全体という一般化された観点から自分自身を経験するのだと、ミードはいう。個人が、他の個人たちをふくむ社会環境、もしくは自らの経験や行動において、その個人が、自分に対して他の個人たちがとる態度を採用したときに、その個人は、自分自身の対象となるのである。こうした経験を可能にするのがコミュニケーションである。ただし、ここでいうコミュニケーションとは、有意味シンボルによるコミュニケーションであり、先に述べたように、その代表的なものは言語であろう。しかし、有意味シンボルというのは、言語的なものは勿論のこと、非言語的なものも含んでいると考えられるため、ここでは、あえて言語的シンボルという用語を用いて展開していく。

言語的シンボルの本質は、シンボルが他者のなかに引き起こすのと同様の反応を、自分自身のなかに引き起こすことができるということであり、コミュニケーションにおいて言語的シンボルを利用することは、他者の役割を取得することであるといえよう。「言語的シンボルは、個人と他者との外在的な相互作用を可能にするだけでなく、自我における自分自身との内的対話をも可能^⑤」にする。この内的対話こそが、自分自身に気づく契機となる。つまり、自分自身のなかの他者の観点から、自分自身を観ることができるようになるのである。そうすると、自分の行為の意味、それが、他者に与える効果を理解できるようにになり、他者に対して、何をどのように言えばよいかといったような自分自身の調整や修正と他者に対する配慮が生じてくる。自我の発達過程に、言語を使ったコミュニケーションが絶対不可欠であるのはこのような理由からである。

四、自我の発達過程と遊戯・ゲーム

ミードは、この自我の発達過程の段階における役割取得を、遊戯(Play)とゲームから論述している。遊戯とゲームについて検討する場合、こどもの観察が、格好の事例となる。

こどもは、「母親」の音声の「模倣」を通して、言語的なコミュニケーションを獲得し、次第に、自他の区別を明確にしていく。やがて、こどもたちは、「規則のあるゲームの先行段階^⑥」として、遊戯(ごっこ遊び)をはじめ。このように、ごっこ遊びは二人以上で行われ、言語的でも非言語的でもある。ピアジェはこれを「自己中心言語」に含めているのだが、彼の定義する「自己中心言語」とは、反復、独り言、集団的独り言であって、話かける自分と話かけられる自分が明確でない。つまり、自他の区別はつきりしていないということである。しかし、少なくとも、ミード理論によれば、この二つには

明確な相違があるとする。こどもたちは、模倣を通して、自分たちの身近な人びとから、社会的に関係のある人びとへと、その域を拡大しながら、かれらの役割を取り入れ、人格を形成していく。こどもたちは、他者の観点を取得し、異なる役割を採用しながら自我を対象化しはじめる。⁽⁷⁾つまり、他者の役割ないし、態度の模倣を通して、自分自身のなかに他者を住まわせ、その観点から自分を観ることができるようになり、自分自身に気づくことになる。しかし、この段階での自我は、十分に組織化されておらず、統一性を欠いているといえる。この段階が過ぎると、相互に組織化された社会的な位置で観れるようになる。それが、規則あるゲームの段階である。

ゲームと遊戯では、根本的に違いがある。遊戯の段階においては、取得する役割は比較的明瞭で、その数も少なくてすむ。しかし、ゲームの段階になると、プレイヤーは、それぞれに、そのゲームに参加するもの全員の役割を取得せねばならない。そうしなければゲームは成り立たないのである。ゲームに参加することも、プレイヤー

全体の多種多様な役割を取得していかなければならない。けれども、そこはなにせ、複数の他者の態度の想定に慣れたこどもにとっては、至難の技であって、この混乱を避け、多種多様な役割期待のスムーズな受け入れのために、これを組織化し、統合し、一般化する必要性が生じてくる。ここに、「一般化された他者」(generalized other⁽⁸⁾)の期待が形づくられることになる。つまり、ゲームにおける「一般化された他者」というのは、ゲームのルールであるといえよう。しかし、勿論、「一般化された他者」というのはゲームのルールだけではなく、こどもの生活のなかには、このような役割取得のプロセスが、地位や役割といった組織活動と絡みあって、常に、存在しているのである。このようなコミュニケーションを通じて、こどもたちは、自分たちの所属するコミュニティの自覚的なメンバーとなる。

言語シンボルによるコミュニケーションにおいて、人びとは、その発せられた言語に共通の意味を備えた上で、議論を展開し、会話を進行させていく。そして、共通の

普遍的な概念の認識の有無にかかわらず、常に、それを利用しているのである。ミードは、人びとのこのような

「共通のシンボル、共通の意味体系によって結合された普遍的な思考・概念の世界」^③を、「話想宇宙」(univers of discourse)^④とよんだ。人びとは、この話想宇宙を把握することによって、自己と他者の立場を相対化し、客

観化する普遍的で中立的な第三者の視点に立つことができる。また、話想宇宙を人格として表現したのが「一般化された他者」ということができるであろう。よって、こどもたちは、自分たちのいちばん身近で、かつ最小単位である家族というコミュニティのなかで、集団の目標と規範に基づいた一種の社会的ゲームをしているのだが、このコミュニティとは、その個人の成長にともなつて、

地域社会のみならず、国家、国際社会へと拡大されるべきものである。この点に関しては、家族のような小集団から、より大きな社会までを同心円的にとらえるミードの考えを、いかにもアメリカ的樂觀主義であると批判する研究者も多いのだが、少なくとも、ミード理論が、

単なるミクロな部分のみを見つめるものではないことを、明示する部分であることは確かであろう。

五、「I」と「me」の内的対話

自我の発達過程を、こどもを通して見てきたのであるが、ここで、自我の発達の基盤となる思考過程に見られる「I」(主我)と「me」(客我)の内的対話についてふれておこう。

社会的自我は、外的なコミュニケーションと内的なコミュニケーションといった二重の側面で形成されることはすでに述べてきた。そこで、内的コミュニケーションをおこなっている自我の二面性を見てみよう。

その二面性とは、意識し、行為する主体としての側面である「主我」と、意識・行為の対象としての側面である「客我」である。そして、「主我」と「客我」の間は、常に、流動的で、相互交換が行われるものである。自我は、「社会的潮流のなかの、いわば、小さな渦で、した

がって社会的潮流の一部^①であり、おかれている状況に
対し、非常に、しかも積極的に、絶えず適応をおこない、
反応を繰り返す過程である。また、換言すると自我は、
「心的実態」・「もの」ではなく、心・精神のはたらき
であり、「機能」・「こと」である。それは、話し手と聞
き手、行為者と応答者という一人二役を演じる、自己刺
激 (self-stimulus) と自己反応 (self-response) という自
己相互作用 (self-interaction) の過程^②でもある。ミ
ードは、このような自我の二側面を「I」と「me」という
用語で表現した。

「I」とは、他者の態度にたいする生物体の反応で
あり、「me」とは、他者の態度（と生物体自身が想定し
ているもの）の組織化されたセット^③である。そして、
「me」と「I」は思考過程にあって、それを特徴づけ
ている内部的意見交換（の関係）を示している^④。

では、人が他者の態度を取得し、「I」として反応す
るとき、どの時点で、「me」と区別される「I」があら
われるのだろうか。ミードはこれを、記憶と関連づけて

説明している。人は、自分の話したことや、情緒的内容
を記憶していて、話したことや、情緒的内容そのものは
「I」であり、つぎの瞬間に記憶しているというかぎり
においては「me」となる。「I」は、記憶というなかに
あるために経験として存在する。記憶のなかの「I」が
一瞬前の自我のスポークスマンであり、意識内容として
は「me」があるだけである。しかし、その「me」という
のは、瞬間前に「I」であった「me」だといえ、それは、
あたかも歴史的人物のように存在していく。これは、
「I」と「me」が、相互交換的であることを示すもので
ある。

身振り会話には、「I」と「me」の区別は存在しない。
これは、他者の反応を引き起こす原因である刺激となる
側が、それ自身のことを少しも示していない単なる刺激—
反応の段階であるからである。しかし、やがて、個人が
その発達過程にともなって、他者の態度、すなわち一般
化された他者の態度を取り込むようになると、組織化さ
れた反応が生じるのである。つまり、「他者の態度が組

織化された『me』を構成し、人はその『me』にたいして『I』として感応する⁽¹⁵⁾わけである。自我は、コミュニティのなかでこそ自分自身を維持しうる。それゆえ、個人は、ある集団内の他者たちの態度を採用していかねばならない。

「I」は「me」を引き出しながら、「me」に反応していくものである。「I」と「me」の両者を合わせもつことにより、社会経験のなかであられるところの「人格」が構成されるのである。自我とは、経験のなかであられるこの識別可能な「I」と「me」の相互作用を通して進行していく社会過程なのである。

今までの論述を改めて整理しておけば、「me」とは、すなわち内面化された「一般化された他者」であり、「I」は、時間の最先端に、時間と同時に進行している生物体としての自己の反応そのものである。そして、この両者のコミュニケーション過程そのものが「自我」である。

六、結びにかえて

T・パーソンズを中心とする構造機能主義と、その抬頭によって沈黙せざるを得なくなったシンボリック相互作用論は、長い間、立場を異にするものとして位置づけられてきた。確かに、シンボルを軽視ないし無視し、自我の存在や人間の主体性を看過してしまった構造機能主義に対する批判は、当然のことといえようが、自我の形成過程の重要な側面を担う役割取得を考えると、そのミクロなコミュニケーション過程に、マクロシオロジーへの可能性を考慮せずにいられないのである。

社会的コミュニケーションにおいて、個人は、他者の役割取得をおこなうのであるが、それは、他者から見られた自己像を前提にしている。つまり、「他者が、自己に向けてくるカテゴリー化の認知プロセスが役割取得の大前提となる⁽¹⁶⁾」のである。

役割取得の過程は、自我形成への自己規定のみならず、

他者規定をも含んでいる。^⑦ あたかも吹く風が、自分の存在を、木の葉の揺れや、湖面のさざなみによって認識するようなものだ。そして、自我の発達が、社会的諸要因のみでなされるのではなく、歴史的、文化的諸要因によって促されるものであることをわすれずにいるかぎり、コミュニケーションの媒体となる言語や、社会的な役割や地位を生む文化的価値が、マクロソシオロジーへの可能性を持つものであることが明確になってくる。ここにおいて、ミクロ・レベル（個人行為者、単位行為）をマクロ・レベル（集団、組織、制度、全体社会、文化）へ拡大し得る可能性が潜んでいると言えるだろう。

他方、マクロ・レベルからミクロ・レベルを注視するならば、個人と社会・文化の関係は、さまざまな役割期待の型を取得し、その相互行為によって成立し、維持されている。そして、これらの役割期待の型は、行為のルールであり、規範（norm）となり、さらに、規範はより一般性をもつ概念である価値（value）に包含される。

パーソンズによると、個人の行為を方向づけるものは、

おおむね、その個人に内面化された文化の価値的要素の一般化と社会のなかで制度化され、相互の行為を規定すると考える。彼の行為理論は、個人、社会、文化の相互の関係を、あらかじめ設定された準拠枠のなかで明らかにしようとするものであって、価値はもともと個人の外部に存在したものとす。^⑧ このことが、人間の主体性、積極性、能動性の軽視、ないし無視であると批判されるところであろう。しかし、個人の内面化する社会・文化的な価値は、本来人間の創り出したものであり、「人間は、社会・文化的産物であるシンボルによって思考し、主体的存在となっていく。社会や文化を離れた個人の主体性などはない」ということを、常に考えておく必要性があるだろう。

そう考えていくならば、パーソンズの文化システム理論が、ミッド理論に多く影響を受けたものであるというもうなづける。

それゆえ、両極に立つとされるこれらの理論は、対抗するものではなく、ときに内から外へ、外から内へと流

動的で、しかも相互補完的な入れ子関係を成り立たせているという見方が可能かも知れない。また、ミードが、同じシンボリック相互作用論者の中でも解釈学的な色合いの濃いH・ブルーマー等と比べて、よりマクロな視点をもつのは、プラグマティズムと機能主義心理学の方法認識をうけつぐものであるからと考えられるが、このことについては、彼をめぐる論争の中で、改めて検討すべきであると思われる。

〔註〕

- (1) 池宮正才「社会的役割と言語―その1―」『中部大学女子短期大学紀要』言語文化研究No.1 一九九〇年三月井上 俊(一九七九)による指摘をあげている。
- (2) 船津 衛『シンボリック相互作用論』恒星社厚生閣 一九七六年二一三頁
- (3) この特徴は加藤春恵子『広場のコミュニケーションへ』勁草書房 一九八六年などでも多く指摘されているが、「内的コミュニケーション」、「外的コミュニケーション」の概念に関しては、間場寿一「社会心理学とは何か」

『社会心理学を学ぶ人のために』世界思想社 一九八六年による。

- (4) G・H・ミード 著 稲葉三千男・滝沢正樹・中野収 訳『精神・自我・社会』青木書店 一九七四年 一四六頁

(5) 間場 前掲書

- (6) G・H・ミード 前掲書 一六一頁
- (7) G・H・ミード 前掲書 一六一頁
- (8) G・H・ミード 前掲書 一〇六頁

- (9) 越井郁朗「自我と社会」『社会心理学を学ぶ人のために』世界思想社 一九八六年

- (10) G・H・ミード 前掲書 九八頁、一六七頁
- (11) G・H・ミード 前掲書 一九五頁
- (12) 越井 前掲書

- (13) G・H・ミード 前掲書 一八七頁
- (14) G・H・ミード 前掲書 一九四頁
- (15) G・H・ミード 前掲書 一八七頁

- (16) 池宮 前掲論文のなかで、池宮氏は、この点を強調し、また、R・D・レインの二者関係表記法及び、McCallとSimmonsの社会的アイデンティティの交渉の図式をも

とに、役割取得のプロセスを含む対人間コミュニケーション構造の図式化をおこなっている。

(17) 池宮 前掲論文 一一頁—一二頁

(18) 碓井・丸山・大野・橋本 編 『社会学の焦点を求めて』アカデミア出版 一九九〇年のなかで、I 行為論において丸山哲央氏のまとめるところによる。

(19) 碓井・丸山・大野・橋本 編 前掲書 三五頁

〔参考文献〕

(1) 山田重樹 「G・H・ミードのコミュニケーション論」

『立命館産業社会論集』一九八一年

(2) 越井郁朗 「H・ブルーマーとシンボルの相互作用論」

『大阪教育大学紀要』第二五巻第Ⅱ部門 一九七六年

(3) 後藤将之 「日本におけるミード研究」 『日本新聞学会

一九八七年春季研究発表会』問題提起用論文要旨

(4) H・ブルーマー 著 後藤将之 訳 『シンボリック相

互作用論』勁草書房 一九九一年

〈付記〉

本稿執筆に際しては、指導教授の丸山哲央先生をはじめ、多くの先生方にお世話になりました。それに、本大学院の先輩である放送教育開発センターの若林良和先生に、中部大学女子短期大学の池宮正才先生、放送教育開発センターの後藤将之先生を御紹介いただき、両先生から貴重な御示唆や資料を賜わることができました。各先生に対して、謝意を表するとともに、今後とも御指導・御鞭撻をお願い申し上げたいと思います。

(大学院博士前期課程)